



2010 年夏バサオ療養所ワークキャンプ報告書



目次

はじめに	2
ベトナムのハンセン療養所	3
バサオ療養所	4
キャンプの概要	6
キャンプの報告	
ワークプロジェクト	8
ホームビジット	10
休日	12
パーティー	13
キャンプの振り返り	
キャンパーの声	16
成果と課題	20
ベトナムと中国の比較	
バサオ療養所とトンチャオ村	21
最後に	22

はじめに

この度、バサオ療養所でワークキャンプを実施するにあたり、お力添え・ご協力下さった皆様に、心より感謝を申し上げます。

本題に入る前に、今回の活動の経緯について、少し触れさせていただきます。

〔QIAO-橋(チャオ)-〕

早稲田大学ボランティアセンターに、QIAO というハンセン病問題支援学生 NGO があります。この団体は、現在、日本財団学生ボランティアセンターの所長を務めていらっしゃる西尾雄志さんと学生により、2006 年に設立されました。QIAO は、毎年春と夏に、中国のいくつかの回復村で、ワークキャンプを行っています。今回、日本からベトナムのワークキャンプに参加した小野寺と私は、QIAO に所属し、トンチャオ村という、広東省の広州からバスで約 7 時間南西へ進んだ場所に位置する村で、ワークキャンプに参加しました。この出会いと活動を切っ掛けに、この度、共にベトナムへ行って参りました。

〔ベトナムワークキャンプの始まり〕

2010 年 3 月、西尾さんがベトナム北部と中部のハンセン病療養所を訪問したことが、今回のワークキャンプの始まりです。私は、アメリカと歴史的背景のあるベトナムに関心を持ち、この活動に携わりたいと思いました。そして、6 月にベトナムを訪問した後、8 月のキャンプに向けて、準備を進めて参りました。

今回は、今後の活動の方向性が定まっていないことから、団体としてではなく、個人名で実施致しました。そして、皆様の多大なるご理解とご協力に支えられ、限られた準備期間の中、無事に初ワークキャンプを実施することが出来ました。

この報告書に目を通して頂き、少しでも、キャンプの雰囲気や現地の方々の様子を、ご想像頂ければ嬉しいです。

高階 まりこ

ベトナムのハンセン病療養所

オランダ救らい協会 (Netherlands Leprosy Relief) によると、現在ベトナム全国には、20 箇所のハンセン病療養所が存在します。これらの療養所は、国立皮膚性病病院 (National Hospital of Dermatology and Venereology) の管轄のもと、運営されています。各療養所は、数名から 1000 名近い回復者で成り立っており、その規模は大中小様々です。また、この他北部や中部には、「療養所」ではなく「村」も存在するといわれ、それらは NHDV の管轄外となっています。



★ = ハーナム省、バサオ療養所

バサオ療養所

バサオ療養所は、ハーナム省という、ハノイから南へ約 100km の場所に位置します。右の写真は、療養所の正門です。



山奥で大自然に囲まれ、雰囲気は静かで落ち着いています。近くの市場までは、バイクで約 15 分離れています。



この療養所には、50 から 90 歳代の、約 50 名の回復者が暮らしています。

政府からの支援は、毎月一人 27 万ドン(約 1200 円)と、一日二食(約 50 円分の昼食と夜食)の支給のみです。朝食は、時々各自でインスタント麺を食べています。多くの回復者は、ニワトリの飼育を行い、生活の足しにしています。



家族と共に暮らせない、或いは家族がいない回復者は、療養所内で暮らしています。また、その一部は病気や後遺症等により、介護を必要としています。その為、療養所には医者、看護婦、セキュリティー等のスタッフが常勤しています。

一方で、療養所の奥にある村には、家族と共に暮らす回復者が、更に約 50 名います。その内ごく一部は、スタッフとして働いています。村で暮らす回復者にも、毎月同額の生活費が支給されますが、食事は自炊しています。村には、小さな子供から年輩の方まで、沢山の人が暮らしています。子供たちが、療養所へ遊びに来ると、とても賑やかになります。



キャンプの概要

[目的]

- ワークを通じて、回復者の生活環境を向上すること
- 学生が世代・国境を越えて、「人と人」との深い繋がりを築くこと

[期間] 8月2日(月)から8月22日(日)

[アドバイザー] 西尾 雄志

(日本財団学生ボランティアセンター所長)

[主催者] 高階 まりこ

(早稲田大学国際教養学部 2009 年 9 月卒)

[キャンパー]

Le Van Phuong (社会人)

Luong Vu Van (Industrial College of Nam Dinh, 2 年) ※1 週間参加

Nguyen Van Loi (National University of Civil Engineering, 4 年)

Nguyen Thi Hai Anh (Thang Long University, 1 年) ※2 週間参加

Nguyen Thi Nhung (Hanoi Law University, 2 年) ※2 週間参加

Pham Thi Trang (Industrial College of Nam Dinh, 2 年) ※1 週間参加

小野寺 優 (早稲田大学人間科学部 4 年)



ベトナム人キャンパーは、全員 Hanoi Blue Dreams Volunteer Group という、現地の NGO 団体に所属しています。週末は、上記以外のメンバーが、多数参加してくれました。

[協力団体]

日本の協力団体

■ 笹川記念保健協力財団

海外のハンセン病問題に取り組む財団法人です。ハンセン病の制圧のほか、当事者の権利回復への支援も展開しています。単にハンセン病を根絶するだけでなく、ハンセン病に対する差別偏見のない世界を目指して活動しています。

■ 日本財団学生ボランティアセンター

学生のボランティア支援を目的に、2010 年に設立されたセンターです。学生のアイディアをベースに、事業化へのお手伝いをしたり、学生ボランティア向けの各種セミナーなどを実施しています。

現地協力団体

■ National Hospital of Dermatology and Venereology (NHDV)

ハンセン病療養所を管轄している、国立皮膚性病病院です。各省に設置された病院が、地元の療養所を管轄しています。

■ Hanoi Blue Dreams Volunteer Group (BDV)

2003 年 9 月、障がい者の生活向上・発展を目指し設立された、現地の NGO 団体です。Hanoi Disabled People Association (直訳:ハノイ障がい者協会)に属し、ベトナムの北部で幅広く、活動を繰り広げています。現在の活動は、人材育成やイベント等を通じた障がい者支援をはじめ、ゴミ拾いを通じた環境問題への取り組み、そして孤児や、エージェントオレンジ(ベトナム戦争中米軍が使用した枯れ葉剤)・HIV/AIDS 等の病気と戦う子供たちへの支援まで発展しています。また、メディアを通じ、社会に幅広く発信を続けることで、一般市民の意識向上も積極的に行っています。

BDV は、他のハンセン病療養所で、定期的に活動を行っていますが、ワークキャンプは初めての試みでした。今回は下見、予算、シャワー室と貯水タンクのデザイン、キャンパー募集等、ワークキャンプを実施する上で、多大なるご協力を頂きました。

キャンプの報告

＜ワークプロジェクト＞

ワーク内容：

シャワー室×2（1室：縦2.5m×横2.0m×高2.8m）

貯水タンク×1（縦2.5m×横4.0m×高1.5m） ※洗い物や洗濯等、私生活に使用する為のものです。

ワーク日数：20日間（開始日から終了日）

ワーク参加者：キャンパー、建築作業員4名、水道・電気作業員2名、BDVメンバー多数(週末)

日毎のワーク記録

日付	ワーク内容（7:00～11:30）	ワーク内容（14:00～17:30）
3日(火)	建築作業員と作業の確認	土台造り
4日(水)	材料の調達(レンガ、セメント、砂、石、鉄等)	土台造り、土台固め、コンクリート作り
5日(木)	レンガの積み上げ、コンクリート作り	レンガの積み上げ、コンクリート作り
6日(金)	レンガの積み上げ、コンクリート作り	レンガの積み上げ、コンクリート作り
7日(土)	レンガの積み上げ、コンクリート作り	レンガの積み上げ、コンクリート作り 貯水タンクのレンガ作業完成
8日(日)	レンガの積み上げ、コンクリート作り	レンガの積み上げ、コンクリート作り、 シャワー室内の細かい手入れ作業
9日(月)	☂	貯水タンクのコンクリート固め、 貯水タンク完成
10日(火)	レンガの積み上げ、コンクリート固め	レンガの積み上げ、コンクリート固め シャワー室のレンガ作業完成
11日(水)	☺	電気・水道の作業
12日(木)	屋根作り	屋根作り
13日(金)	屋根作り	屋根作り完成
14日(土)	☺	☺
15日(日)	シャワー室内の地面固め	☺
16日(月)	☺	屋根上に貯水タンク設置
17日(火)	屋根周辺作業、コンクリート作り	屋根周辺作業、コンクリート作り
18日(水)	シャワー室内のタイル貼り、コンクリート作り	タイル張り、コンクリート作り、 コンクリート固め
19日(木)	タイル貼り、道路舗装	タイル貼り、道路舗装
20日(金)	洗面台、鏡、電気等の設置、仕上げ	洗面台、鏡、電気等の設置、仕上げ
21日(土)	☂	ペンキ塗り
22日(日)	ドアの取り付け	☺

☂……雨天

☺……休日

ワーク風景

ワーク開始！ここに、まず土台を作りました。



貯水タンク：レンガの積み上げ作業終了！



週末：大勢でコンクリートのバケツリレー！



完成です！屋根上に水タンクを設置しました。



皆でコンクリートの材料を運んでいます。



シャワー室：レンガ積み上げ作業中！



シャワー室内：洗面台、手すり、鏡などを設置。



壁は白いペンキで塗りました。



※シャワー用の水タンクと貯水タンクは、隣にある古いシャワーの水道管と繋げ、地下水が流れ込むようにしました。

<ホームビジット>

ワークの合間や休日は、主に療養所内外を周り、回復者の方々と時間を過ごしました。その時の様子を、写真と共に一部ご紹介します。



キンおばあちゃん

異常な体力と筋力の持ち主。時々キャンパーに混じり、ワークを手伝ってくれました。キンおばあちゃんは健常者ですが、ハンセン病を患ったご主人と共に、一緒に療養所で暮らしています。カエルや毛虫を手掴みし、よく追いかけて回されました。

ドウックおじいちゃん

キンおばあちゃんのご主人。持病があることを感じさせない、とても明るく、笑顔が素敵なおじいちゃんです。



ムエイおじいちゃん

歌とハーモニカが大好きなおじいちゃん。毎日テレビを見ながら、ハーモニカを練習していました。持病を持っている為、家族と離れ、療養所で暮らしています。悪気なくつねる、ひっかく、叩く等の行為を繰り返されつつも、日々格闘の末、仲良くなりました。

トアおばあちゃん

ハンモックで風に揺れることが日課のおばあちゃん。義足の為、身の周りのことをこなすことが一苦労ですが、いつもケラケラ笑っていました。





ギィおじいちゃん

笑顔が素敵なおじいちゃん。

一年に一度、家族が会いに来てくれるそうです。ギィおじいちゃんは、街の人はまだハンセン病を恐れ、差別は残っていると言っていました。滞在中、そのようなことをあまり感じなかった為、この言葉がとても印象的でした。

レおばあちゃん(写真右)

療養所の外で生活をしています。自身の生活も苦しいのに、よく他の回復者に、庭で採れた野菜を、届けていました。

そして、小野寺さんに、虫刺されに効く薬を下さった、救世主です。



ティおじいちゃん

粘土の達人、ティおじいちゃん。粘土に色を付け、このような人形を作って見せてくれました。そのスピート、僅かに一体7分！

年に3ヶ月はバイクでベトナム中を周り、イベントに参加し、作り方を教えたり、作った人形を売り回っているそうです。

ウォンおじいちゃん

14歳でハンセン病を患い、その後、戦争の影響等で、4箇所の療養所を転々と周ってきたそうです。踊りが上手な、おじいちゃん。



※主な通訳は、療養所に滞在していらした、2名のカトリックの助祭さんをお願いしました。

＜休日＞

お墓参り

ホームビジット中、あるおじいちゃんから、お墓の存在を教えてくださいました。回復者の方が亡くなり、家族が遺骨を取りに来ない場合は、療養所のお墓に納められるそうです。キャンパー全員で、このお墓へお参りに行きました。



お墓は、正門手前の脇道を、奥へ1km程進んだ先にありました。車が通った形跡がある以外、道の周辺は草木が生い茂っており、人が出入りする気配は、殆どありませんでした。

山奥だったので、やまびこが、とても透き通って聞こえました。

お墓は、草木が生い茂っている中に、不規則に建てられていました。それぞれ色、形、大きさの異なるお墓が、20から30程ありました。

お墓参りの途中、突然向こうから牛が数頭やって来ました。結局牛の圧力に負け、その後、療養所まで撤退しました。



洞窟探検

村の奥に洞窟があると聞き、探検に行ってきた。



意外にも、本格的な洞窟でした。村に住むマイ少年とキャンパーで、ゴツゴツ・ツルツルした岩を登り降りし、最終的に道を間違えたのか、行き止まりでした。代わりに、山奥でしか採れないという、ベトナムで有名らしき、得体の知れない花を摘んで帰りました。

涼しい洞窟の中で時間を過ごし、適度に身体が涼んだところで、入口まで引き返しました。

近くにある川で、手足を洗い、療養所へ戻りました。帰り道、回復者の方から野菜を頂きました。



＜パーティー＞

BDV 主催パーティー

キャンプの最終日に、パーティーが開催されました。パーティーは、メリアホテルという、ハノイで有名なホテルとのコラボレーションで行われました。この企画は、BDV が以前から別の療養所で行っており、今回はホテルにバサオ療養所へ来て頂き、回復者全員にフォー（ベトナムの有名な麺料理）を調理して頂きました。

今回はパーティーと一緒に、ワークキャンプの閉会式をやらせて頂きました。



パーティーには、多くの回復者の方々が、参加して下さいました。

☞ (写真手前右の男性) タイン氏 (BDV 代表)

バン院長から、回復者のタインおじいちゃんへ、鍵を手渡して頂きました。

この鍵は、シャワー室の鍵を象徴し、回復者の方々に「これからどうぞ使って下さい」という意味を含め、BDV のメンバーが作ってくれました。

※バン院長は、バサオ療養所を管轄している、地元の病院の院長です。



☞ (写真中央) バン院長



小野寺と高階から、簡単な挨拶をさせて頂きました。この場をお借りし、日本で多くの方々からご寄付頂いたことを、ご報告しました。

フォーが出来あがるのを待っている間、回復者の方々と学生で、世間話をしていました。

また、この日はキャンプ最終日だったので、各自、お別れをしに療養所を周りました。



キャンプの振り返り

＜キャンパーの声＞

キャンパーの感想をご紹介します。

[Phuong] (22 歳・男・社会人) ワークや料理等、何でも器用にこなしてしまうスーパーキャンパー！

僕が今回キャンプに参加をした理由は、これまで、ボランティア活動の経験が殆どなかったからです。応募者を見た時、男性が一人もいなかったこともあり、友達の Loi を誘い、一緒に参加しました。キャンプで一番苦労したことは、英語が話せず、日本人キャンパーとコミュニケーションが取れなかったことです。でも、お互いにジェスチャーを使って会話が通じた時は、面白かったです。回復者は皆大好きでしたが、ムエイおじいちゃん(p.9)は面白く、親しみやすかったので、特に印象的です。キャンプ中、一番楽しかったのは、週末に BDV のメンバーが来て、皆で一緒に時間を過ごした時です。皆が帰ってしまった夜、またキャンパー6 人だけになってしまった時は、寂しかったです。時々、ホームシックにもかかりました。療養所内は電波が悪く、携帯が上手く通じなかったので、まるで昔の生活を送っているようでした。でも一番寂しかったのは、最終日です。回復者や村人、そして子供たちと別れるのは、辛かったです。今も、バサオ療養所を思い出しては、懐かしくなります。次回またワークキャンプがあれば、また参加したいです。この活動は、意味のあることだし、とても面白いです。回復者も、自分たちのことを、とても好いてくれていました。例え今回以上にワークがきつくても、また参加したいです。



[Loi] (22 歳・男・大4年) 強い責任感で、ワークを統括してくれた心強いキャンパー！(写真左)



このワークキャンプは、僕にとって初めてのボランティア活動でした。今、3 週間のキャンプを振り返り、皆と過ごした時間がとても懐かしいです。バサオ療養所で生活したことにより、ハンセン病を知り、回復者と触れ合うことが出来ました。僕たちがワークをやっている姿を見て、回復者が喜んでくれていることが、嬉しかったです。日本人キャンパーは、ワークに対して凄く真剣で、時間内に終わらせることを徹底していました。そこは、ベトナム人と違ったと思います。

ワークはとても大変だったけれど、シャワー室が完成した時の喜びは、とても大きかったです。毎日、誰が食材の買い出しに行き、料理し、食器を洗うか、皆で話し合ったことが、楽しい思い出です。またワークキャンプをやる時は、是非参加したいです。

[Hai Anh] (18 歳・女・大1 年) 高校を卒業したばかりで、今後期待の最年少キャンパー！(写真左)

3 週間のキャンプを通じて、今までにない経験をする
ことが出来ました。

最初、私は回復者に恐れられ、避けられるのではない
かと思っていました。でも実際に会ってみると、私た
ちに故郷の歌を歌ったり、自分たちの人生について、
語ってくれました。人と人の繋がり大切さを、実感
した気がしました。この3 週間で、最初は全く知らな
かったキャンパー同士が、互いに知り合い、大きな家
族のようになりました。日本人キャンパーとの言語の
壁は、すぐに克服出来ました。夕食後は、家族や友達、恋愛等について色々語り合い、国が違っても、似てい
るところが沢山あることを知りました。

キャンプ中、回復者の為に 1000 羽鶴を折ろうとしましたが、結局 100 羽しか折れませんでした(※実際は、300
羽程折りました)。思っていたよりも大変だったけれど、楽しかったです。あと、日本のカレーは凄く美味し
かったです。そして、日本人は何をするにも、用心深いことを知りました。

今写真を見ると、沢山の思い出がよみがえります。私はキャンプを通じて、学んだことが沢山あります。今は、
自分にもっと自信を持てるようになりました。そして、自分自身のことだけでなく、もっと他の人のことを、
考えられるようになりました。絶対また、キャンプに参加したいです。



[Nhung] (19 歳・女・大2 年) 驚異の長髪を持ち、驚異のスピードで英語力を身に付けたキャンパー！



キャンプでは凄く働いて、とにかく疲れました。
他のボランティア活動で、こんなに疲れたことは
ありません。また、今回初めて外国人と接し、知
らない人との共同生活を経験しました。凄く楽し
かったです。同時に、日本人と話すことで、英語
が上達しました。

回復者は、皆とても優しくかったです。社会からの
偏見で沢山辛い思いをしてくれているにも関わらず、
とても明るく、寛大な印象を受けました。

ワークキャンプを通じ、回復者の生活を知り、気
持ちを聞くことが出来て、とても良かったです。まりこ(高階)から、日本のハンセン病のことも、聞く
ことが出来ました。次回のワークキャンプも、時間が合えば、是非参加したいです！

【小野寺 優】 皆の盛り上げ隊長！

この度のキャンプを終えて、特に記憶に残っていること、また、心にとどめておきたいことが、大きく2つあります。快復者のこと、そして、自分自身のことです。

ハンセン病の快復者の方々が、過去にどのような差別を受け、どのような暮らしぶりをしていたかという事実を知ることにもさることながら、わたしは、快復者の方々が、いま、生きがいとしていることについて、より大きな関心があります。差別の歴史は、書籍等によって少なからず知ることができます。しかし、快復者の方々の現在の暮らしぶりを知るには、現地に行くよりほかないのです。これが、今回わたしがキャンプに参加した大きな理由であり、目的でもありました。

しかしながら、わたしは、快復者の方々に「生きがいは何ですか」と正面を切って尋ねることができませんでした。怖かったのです。「生きがいって言ったって、手足は不自由だし、療養所の外へは出られないし、毎日意味もなく過ごしているよ」といった言葉が出てくるのではないかという不安があったのです。それでも、3週間以上そばで暮らしていると、快復者の方々の暮らしぶりを、少しは知ることができたと思っています。

たとえば、日本で言うところの「将棋」に興じている男性陣の姿を毎日見ました。女性は、カトリックの方々が多く、こちらでも毎日療養所内のチャペルでお祈りをしている様子でした。それから、男女を問わず、みな「歌」が大好きなようでした。快復者の方々が歌を歌っている時の、あの素敵な笑顔が忘れられません。ベトナム人の学生キャンパーが毎日声を張り上げて歌う姿から、これはベトナム人の国民性というべきなのかもしれません。しかし、快復者の方々にとって、「歌」は格別な意味があるように思えました。

現在は、療養所内のすべての部屋にテレビが設置されています。ビデオデッキや将棋を持っている人もいます。快復者の多くが、バサオの療養所で20~30年暮らしていることを踏まえると、こうした娯楽がなかった頃、「歌」こそが、療養所生活における最大の楽しみだったのではないかと私は考えました。そして、それは現在もなお、療養所での生活に色を添えているように見えました。わたしたちは、快復者の方々の部屋から漏れる音楽を聴きながら、また、快復者の方々が歌っているかたわらで、毎日毎日シャワーを建設したものです。

だからこそ、わたしは、「歌」で快復者の方々を喜ばせたいと思いました。また、「歌」で何か行動を起こせば、きっと快復者の方々が喜ぶに違いないという確信もありました。そこで、ベトナム人の学生キャンパーに、老若男女を問わず誰もが知っていて、すぐに覚えられる歌を教えてもらうことにしました。キャンプの最終日に、シャワーの完成を祝ってイベントを催すことになっていたもので、その際に快復者の方々の前で披露し、より一層喜ばせたいと思ったのです。その想いは届いたと信じています。快復者の方々は、満面の笑みでわたしたちの歌を聞いていました。しまいにはアンコールまで頂戴し、快復者の方々もわたしたちに合わせて一緒に歌ってくれました。言葉も文化も違うわたしたちを繋いだのは、ひとつの「歌」だったのです。この出来事が、3週間のキャンプ生活のなかで最も心に残っていることです。

また、今回のキャンプでは、自分と快復者の方々との関係について考えさせられました。



キャンプの間、気になっていた事があります。療養所では、快復者にご飯を作る係の者や看護婦、守衛など多くのスタッフが働いています。そのスタッフの、快復者に対する態度がやけに冷たく感じられたのです。わたしたちにはフルーツを御馳走してくれたり、しきりに話しかけてきたりするのに、快復者とは十分なコミュニケーションすらとっていないようでした。快復者の方も、わたしたちにはあんなに素敵な笑顔を見せるのに、スタッフに対してはどこか不満げな様子でした。当初、スタッフの人たちが快復者に示す態度を見て、わたしは憤りを感じていました。

しかしある時、そんなスタッフの態度を批判することなどできないことに気付きました。スタッフの快復者に対する態度は、わたしが家族に接する時のそれと似ているものがあつたからです。もちろん、いつもというわけではありません。ただ、うっとうしく感じられるときや、面倒くさいときに、感情のこもっていない接し方をすることがあります。快復者の前では、そのようなことはありません。いつも、何を語りかけているのか必死で耳を傾け、すれ違う時には大きな笑みをつくります。わたしはこの時、自分が快復者の前では「いいこちゃん」であることに気がつきました。「がんばっている」とでもいうのでしょうか。とにかく、偽りの自分を見せていたのです。

それは、快復者がわたしにとって未だ「特別な」存在であるということを暗に意味しているようでした。きっと、「がんばって」いない、家族や親しい友人と接しているときの自分だったら、快復者に対してスタッフと同様の態度をとることもあつたでしょう。まだまだ、快復者の方々を「かわいそう」な存在として、自分が何かをしてあげる対象としてとらえていたということに気付かされました。同時に、「いいこちゃん」を3週間貫き通している自分は、まるで快復者の方々との距離を縮める努力をしていないようで、自分自身に失望しました。

これは、次回のキャンプでの課題です。快復者の方々の前で、嘘偽りのない自分をさらけ出したら、また違った発見があるのではないかと、いまは思っています。

成果	課題
・シャワー室と貯水タンクの建設 ・回復者との繋がり 特に3週間、毎日ワークを見守ってくれていた回復者の方々と、親しくなることが出来た。ベトナム人キャンパーも、個人的に、バサオ療養所を訪問する計画を立ててくれている。 ・異文化交流 ワークやホームビジット以外に、歌を歌い、折り紙を折り、ご飯を作り、言語を教え合うことで、キャンパーが、互いの文化や人種を学ぶことが出来た。3週間共に過ごしたお陰で、キャンプ終盤は、ジェスチャーでの意思疎通がスムーズになった。 ・スタッフ・村人との繋がり 回復者は勿論、療養所で働くスタッフや村に住む若者と、関わりを持つことができた。スタッフや若者は、社会との繋がりがあるので、協力し合うことで、回復者の為の活動範囲を広げることが出来るかもしれない。 ・地域との繋がり 毎朝、近くのマーケットへ食材の買い出しに行く際、現地の方々と会話することで、バサオ療養所のことを多少知ってもらうことが出来たように思う。 ・BDV との共同作業 BDV と共にキャンプに携わることで、現地の NGO が普段、どのような活動を行っているのか、知ることが出来た。また、BDV には、ワークキャンプという新しい形の活動を知り、実際に体験してもらうことが出来た。	・ワークと休日のバランス キャンパー数が少なく、一人ひとりのワーク負担が大きかった。時間と気持ちの余裕がなくなり、皆疲労がたまってしまった。次回以降は、もっと余裕を持って行えるワークを企画・実施する。 ・参加者の募集 キャンプ直前に、当初応募してくれていた7、8名のベトナム人が、全員キャンセルとなってしまった。日本人参加者もキャンセルがあり、2名に止まった。今回は十分な準備期間を確保すると同時に、広報に力を入れ、ベトナムワークキャンプの魅力を幅広く伝えていく。 ・ワークのクオリティ 今回はクオリティが高く、キャンパーが行えない作業が多かった。キャンプに適したワーク(キャンパーが主体的に作業する)が行えるか、療養所・村の生活環境を見て、判断する必要がある。 ・言語の壁 ベトナム人と日本人との間で、コミュニケーションを取ることが困難だった。英語や日本語を話せるベトナム人キャンパーか、ベトナム語を話せる日本人キャンパーがいるとより良い。そうすれば、お互いもっと深い話しが出来、更にキャンプが楽しくなると思う。

ベトナムと中国の比較

＜バサオ療養所とトンチャオ村＞

今回のワークキャンプを経て、ベトナムのバサオ療養所と、中国のトンチャオ村を、比較してみました。

	バサオ療養所	トンチャオ村
類似	[場所] ・山奥(近くのマーケットまでバイクで約 15 分) [生活環境] ・野菜の栽培や鶏の飼育 [信仰] ・一部カトリック信者(神父の出入り有)	[場所] ・山奥(近くのマーケットまでバイクで約 20 分) [生活環境] ・野菜の栽培、鶏・牛等の飼育 [信仰] ・一部キリスト教(牧師の出入り有)
相違	[療養所と村の規模] ・回復者約 100 名とその家族多数 [場所] ・道路は舗装され、車の出入りがスムーズ [生活環境] ・医療係者(医者・看護婦)が常勤 ・毎月政府から生活費と食事(一日二食)が支給 ・食事はスタッフが調理 ・家族と繋がりのある回復者が多い ・部屋を 2 人から数名で共有(男女別々) [その他] ・識字率：大多数の回復者が、読み書き出来る	[村の規模] ・村人(回復者)40 名弱 [場所] ・道は細くてデコボコ、車の出入りが難しい [生活環境] ・医療関係者は不在、病院へ満足に行けない ・毎月政府から生活費とわずかな医療費が支給 ・ご飯は自炊 ・家族と繋がりが無い村人(回復者)が多い ・一人一部屋(夫婦は一緒) [その他] ・識字率：一部の村人は読み書きが出来る



村人☞



☞ トンチャオ村

道路舗装のワークをした時の写真☞



※上記は、小野寺と高階の視点による、ベトナムと中国に数多くある療養所と回復村の、一比較に過ぎません。

最後に

3週間のキャンプは、振り返るとあっという間でしたが、決してスムーズで楽しいだけではありませんでした。言語の壁によるコミュニケーション不足で、意志疎通が難しく、わだかまりが生じることがあれば、ワークの負担による疲労で、余裕がなくなることもありました。また、文化や価値観の違いから、互いに戸惑うこともありました。しかし、3週間離れたくても離れられない、協力せざるを得ない環境の中で、徐々に、キャンパー同士の良い関係を築いていくことが出来たような気がします。キャンプ終盤に差し掛かると、「あれ」、「これ」といった、夫婦間に成立する曖昧な表現でも理解し合い、ジェスチャーから相手の伝えたいことを、多少当てることも出来るようになりました。もし、今回参加してくれたベトナム人キャンパーと、次回もキャンプを一緒に行えれば、更に実りのある活動を展開出来るのではないかと、期待しています。

[今後の大まかな予定]

2010年10月下旬：ベトナム北部・中部の療養所・村の下見

2011年2月か3月：再度下見、ミニキャンプ(少人数・短期間でのキャンプ)を検討

2011年8月上旬：第2回ベトナムワークキャンプ

現在、2011年の夏に、第2回ベトナムワークキャンプを実施したいと考えています。次回のキャンプ開催地は未定ですが、別の療養所・村も念頭に入れ、準備をしていく予定です。

また、今後の活動方針・活動方法に関しては、現在検討中です。

報告書の内容に関しまして、何かご質問・疑問等ございましたら、以下のアドレスまでお問い合わせ下さい。

今後とも、是非ベトナムでのワークキャンプ活動を応援して頂ければ、幸いです。

最後まで目を通して頂き、ありがとうございました。

《お問い合わせ先》

高階 まりこ(たかはし まりこ)

E-mail: vietnam.workcamp@gmail.com

ホームページ: <http://vietnamworkcamp.com/>

以上